

月刊 JMTU  
5月号

# テイクアウト

日本金属製造情報通信  
労働組合大田地域支部  
セガグループ分会  
2020年発行  
新型コロナウイルス対応版



## 春闘妥結金額

旧SHD(一般平均)	895円
本給	895円
評価給	4302円
合計	5197円
夏季一時金	
係数2.0	
旧SIC(一般平均)	716510円
本給	968円
評価給	4171円
合計	5139円
夏季一時金	
係数2.0	
SLS(一般平均)	706749円
本給	859円
評価給	3585円
合計	4444円
夏季一時金	
係数2.0	
	710803円

# 2020年春闘 夏季一時金妥結

私たち労働組合JMITUセガグループ分会は、2020年春闘・夏季一時金について妥結いたしました。

今春闘は、要求を提出しましたがコロナの影響で団体交渉は1回のみ、同一労働同一賃金では、アルバイト・パートタイマーに、家族手当・割増賃金が正社員と同じになるのみでその他交渉を強く行いたかつたのですが、この状況の為、今年の秋闘に重点をおいて交渉していききたいと思います。

## 夏季一時金支給日は

6月19日(金)

またこの緊急事態宣言出社停止中に、組合の方に、セガ本

社勤務の方から意見が寄せられました。「各社、各職場で出社に対して大きく違いがあり、感染拡大を回避するために出社停止により在宅勤務で給与通常支給される人がいる一方で、業務の都合と言うだけで、感染リスクがあるのに何の手当等も無く出社させられているのが納得できない、平等ではない。」と言う意見でした。

この件については会社に話しましたが、会社としては「コロナ対応については、既に発信の通り、「出社停止」が会社の方針です。但し、例えば給与や取引先向けの支払業務など（これに限らず）どうしても止めることはできない業務がある場合には出社を認めるという考

え方で、申請書を提出してもらったうえで会社として了承する形にしています。企業が社会的責任を果たすうえでも、全社員100%出社停止という訳にはいかないことはご理解ください。大崎本社で言うと出社比率は2%前後です。」

その後その不満解消の為かわかりませんが、会社から「感染症対策長期化に伴う一時金について」の発表があり、在宅勤務推奨期間の長期化に伴う物理的・精神的負担や今後にわたる在宅勤務体制構築に向けた取り組みの支援の一環として一時金が支給されました。緊急事態宣言が発令され、急な在宅ワークになり、今回の件

で普段は在宅勤務とは無縁だった職場でもメリット、デメリットなどもたくさん出てきたと思います。

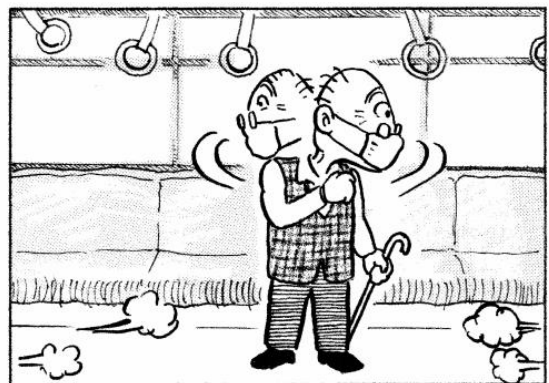
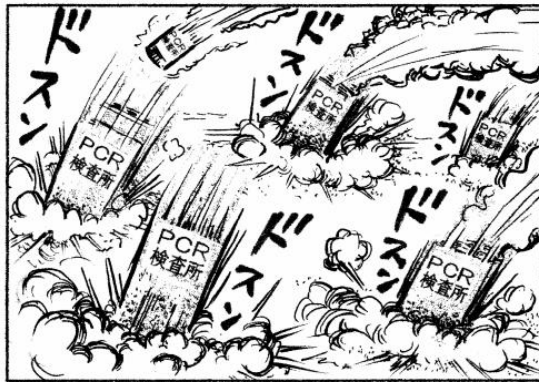
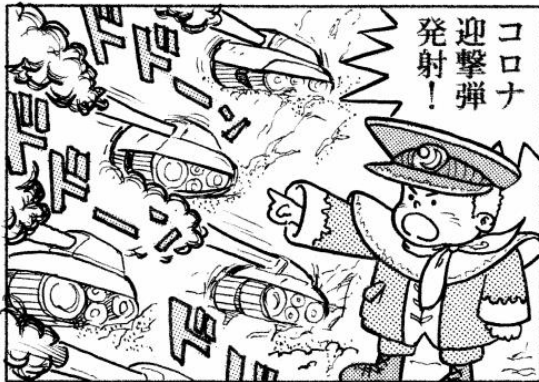
また、どうしても行わなければいけない業務で感染リスクの高い電車に乗って出勤し、もし感染したら労災になるのかなどいろいろな問題も出てきました。

緊急事態宣言が解除されました。コロナが収まったとはいえ、ワクチンがない今はまた感染する危険があります。

国の対応にもかなり問題はありますが、今後の働き方も以前とは変えていかなければならない。

# 4こま漫画

川崎よしき



ショートショート

## 空 気

仙洞田一彦

目立たない奴というのは、彼に対する褒め言葉かもしれない。中肉中背、中年の彼はそうして生きてきた。

彼が座右の書としているのはチェーホフの短編小説「可愛い女」だった。とはいっても、その小説を読んだこともなければ、本も持っていない。学生の頃だったと思うが、この小説についてみんなが話していた。その輪に加わっていたのか、傍で聞いていたのか、今となっては、はっきりしない。だが、不思議にその小説のあらすじは覚えている。

女が、遊園地の経営者であり興行師の男と結婚すると芝

居が人生にとって何より大事だと人に言う。次に結婚したのが、材木商で、そうなったら材木の相場だけが興味の対象になって、それを話題にする。その後、獣医と結婚したら、話題が家畜のことになったという。自分の考えは持たないで、夫の言うことを、さも自分の考えのように話すというような内容だった。

もともと彼にそういう下地があつたからかもしれないが、彼の頭に「可愛い女」の生き方が、彼流の考え方で、すっかり刷り込まれてしまった。自分の考えを持たないで、人に従うというのは楽だと思つたかも知れない。

目立たない成績で卒業し、地味な会社に就職した。勤続二十数年。案に相違して、決

して平たんな道ではなかった。目立たないようにするには空気を読まなければならぬ。空気の読み違いは命取りになる。時間が経ってみると「可愛い女」にしたって、単純に夫の口真似をしていたのだからかと思う。懸命な努力が隠されていたのではないだろう

かと思うようになった。職場のみんな、つまり職場世論がどう動いているのか敏感にならなければならぬ。

若い頃は上司の言う通りに動いていれば大体よかった。ただ、上司自身が周りからどう思われているか正確に判断していなければならぬ。主流派に属している上司なら問題はない。自立している上司、反主流派に属している上司の場合は気を付けなければなら

ない。言いなりに動いていたら「一味」だと思われてしまう。上司が左遷されたりしたら、巻き添えを食う恐れがある。

「君はあの上司の言いなりになっているが、君自身の考えはどうなんだ」

などと、上司のさらにその上の管理職に質問されたらどう答えるか。うっかり、「私はまだ命令されるままに」などと答えるわけにはいかない。自ら無能であると答えているようなものである。

その管理職がなぜ自分についていう問いを発しているのか考えなければならぬ。その管理職が私の上司をどう思っているかを考えなければならぬ。より上の人の意向を察しなければならぬ。忖度す

る相手にも順位がある。より上の人に付度しなければならぬ。

「私は上司とは考えが違いますが、上司から命令されたことですからやりました」

もしそう答えたなら、「それなら君の考えはどうなんだ」と突っ込まれるかも知れない。

出世しなくても、なんとか定年まで勤め続けられそうだし、そう思っていたら、とんでもないことになった。新型コロナウイルス感染などという問題が起こった。

職場の会議が開かれた。彼も目立たないとはいえ、勤続年数は、彼を職場のそれなりの位置に押し上げた。会議室の席は課員で埋まった。この席が一番偉いのは課長で、彼よりも年は下だった。でも、

彼にとつては大した問題ではない。ぐるりと四角に並べられた席が、課長の近くであることの方が問題だった。目立たない角で、出入口に近い端の方がいいのだが、空気の流れに沿うと席が目立つところになった。

「コロナの影響でわが社も苦境に立たされている。何とかここを生き抜かなければなりません。そのためには苦境に負けない強い精神を集めることが必要です」

若いわりに精神論か、などと思いつつながら彼は課長の言葉を聞いていた。科学的、合理的にこう突破するというわけではない。と、思ったところで、彼に対案があるわけではない。いつもの発破かけか、と思った。課長の話は続いて、

結論になった。

「それで、人を半分減らすことになった。退職を希望する者は名乗り出してもらいたい。私の個人的な希望としては、初めに述べた通り、強い精神力を持った人を残したい」

長年鍛えられてきた彼の鋭敏な感覚は、課長のその言葉が終わった途端、みんなの意識、視線が自分に向かっていることをとらえた。思い過ぎかもしれないが、しかし、課長が十分も話していないのに、人を減らすのが当然という空気になってしまった。

しかも、空気は、お前が一番に名乗りを上げるといふ雰囲気だ。誰も声を上げていないが、彼の耳にはそう聞こえている。

「苦境下でも、社長は退職金

に少しは色を付けるとおっしゃっている。でも、次はないともおっしゃっている」

課長が追加して言った。言い終わると、すぐそばに腰掛けている彼の方に鋭い視線を向けた。

彼は、空気を讀んできたが、その空気が自分に向かっていた経験は初めてだった。全身をアンテナにして、それが確かな感覚なのか再確認したが、まちがいないようだった。然し今、いくら自分の信念だとはいえ、その空気に従うわけにはいかない。彼は発言を求めつつも、勢い良く手を挙げた。

「課長」

「ありがとうございます」  
課長が大きな声で答えた。  
何か誤解が生じたようだ。